

発展的な学習ー日本史と関連づけながらイスラムを扱う

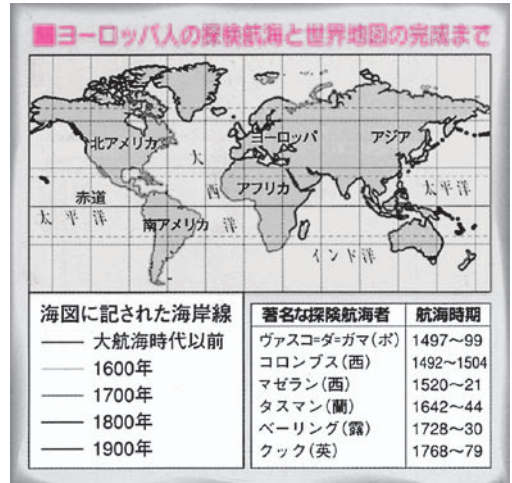
札幌市立柏中学校 田丸明史

1 はじめに

イラク戦争が終わり1年が過ぎた今も、連日のようにイラクに関するニュースが報道されている。生徒たちはなぜ争いは終わらないのか、イラクの国民はこの戦争をどう思っているのか、様々な疑問を持ち、イスラムについて少しずつ関心を持ち始めている。しかしこちらから、イスラムについて質問してみると、驚くほど何も知らないことが多い。なかには、イスラムの国々を軽視した発言も飛び出し、ドキッとさせられることもある。たしかに、自分たちを取り巻く環境を考えれば、同じアジアでありながら、欧米よりも遠い国なのかもしれない。そう考えると、改めてアジアを含めた世界史を学ぶことの大切さを痛感する。しかし現在のカリキュラムでは、教科書を終わらせるので精一杯と感じているのが現状であり、以前のように、集中的に世界史を取り上げることなどできないことは明白である。

2 授業の展開例

昨年12月の学習指導要領の一部改正を受けて「発展的な学習内容」が明記され、世界史を扱う必要性がますます増してきたと感じている。日本史と効率よく関連づけて、少しでも世界史を扱おうという意識で授業を行っているが、実際にどの単元で何を関連させ、どう発展させていくのか、とくにイスラム社会は、我々の普段の生活でもあまり触れることのない分、展開が難しいと思う。私自身は、16世紀半ばの戦国時代で「鉄砲、キリスト教の伝来」を導入にし、また、戦後の高度経済成長で「オイルショック」を導入にし、イスラムについての学習を展開している。今回は、オーソドックスではあるが、第4章の1節「戦乱から天下統一へ」の「1 南からやってきたヨーロッパ人」の授業を2時間扱いにした展開例について、簡単に紹介したい。



帝国書院版「最新世界史図説タペストリー 初訂版」p.30

1 時間目

1 南からやってきたヨーロッパ人 その1

導入	鉄砲はどこから伝わったのだろう
	・ワークシート(資料1)を使いポルトガルの位置を確認する。
展開	なぜこんなに遠くの国の商人が日本に来たのだろう
	・香辛料(胡椒)を例に、ポルトガルやスペインが新航路の開拓に力を入れた背景について説明する。(イタリアの東方貿易についてふれる)
	・コロンブス、バスコ=ダ=ガマの航路を地図に書き込む。
発展	・イスラムの交易圏(資料2)を示し、大航海時代以前からイスラム商人が「陸」だけでなく「海」のルートも自在に行き来し広域なネットワークを築いていたことを説明する。
	・ポルトガルはインドを拠点にアジア貿易に力を入れたことを確認し、日本に鉄砲が伝わった歴史的な背景をまとめる。
発展	・新航路発見後のヨーロッパ社会の変化を説明する。 (ワークシートにアメリカ大陸の記入、スペインの南米進出、マゼラン世界一周など)

2 時間目

1 南からやってきたヨーロッパ人 その2

導入	<ul style="list-style-type: none">・前時の復習と合わせ同じ時期にキリスト教が日本に伝わったことを確認する。・ザビエルとイエズス会について簡単に説明する。
展開	<p>ザビエル（イエズス会）はなぜ、東アジアまで布教活動にきたのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none">・中世ヨーロッパの歴史について以下の点を確認しながらまとめていく。・ルネサンスの流れを説明する。（イタリア商人の東方貿易独占→イタリアルネサンス→ヨーロッパ諸国のルネサンス）・ルネサンスの代表的な作品・科学技術について調べる。・ルネサンスの三大発明である火薬、羅針盤はイスラムから伝わったこと、錬金術、占星術など、科学・芸術分野において、イスラムが果たした役割について考える。・ルネサンス後、中世カトリック的価値観の否定から宗教改革が起こり、宗教戦争の拡大、そして反宗教革命が広がったことを説明する。・日本にキリスト教が伝わった歴史的な背景を、羅針盤（新航路の発見）と関連づけてまとめる。
発展	<ul style="list-style-type: none">・大航海時代、ルネサンスというヨーロッパの大きな出来事はイスラム社会と深く関わりのあること、そしてこれらの海外での出来事が、日本にどのような影響を与えたか考える。

「ヨーロッパの国々では（香辛料が）たいへん高価な品物」であったといっても、どれくらい高価だったのか生徒たちはピンとこないようである。せいぜい10倍くらいという意見が大半であった。当時の香辛料の価格は原産地と比較すると数百倍にも跳ね上がっており、その数字を示すだけで、「直接アジアへ到達する航路を発見しようと考えはじめた」という教科書の表現も納得できるようである（資料3）。生産から販売までの商品の流通と価格の変動については、身近な清涼飲料などを例に説明を加えると、生徒たちの理解がさらに増し、この後の授業でも「中継貿易で発展した」

貿易の利益を得るために…」という説明もわかりやすくするようだ。しかしここで重視したいことは、胡椒の値段の変動ではなく、イスラム商人がどれだけ広範囲に商業活動をし、陸の道だけでなく、海の道も（バスコ=ダ=ガマ以前に）自由に移動し、巨大なイスラムネットワークを築いていたということだ。このことは、「世界史のしおり」2003年9月号（帝国書院発行）の中で、慶応大学の坂本勉先生が「イスラーム世界は、自然地理的な環境、生態系において多様なところである。砂漠や草原で家畜を遊牧しながら生活する者もいれば、オアシスや河川の流域で農業を行う人たちもいる。また、地中海やインド洋といった海を暮らしの舞台とする人たちも多い。こうした生活様式のきわだった違いが、この地域に早くから分業を前提とした交換、商業を発達させた。

遊牧民と農民は、不足するものをたがいに交換しあっていたが、そうしたなかからいつしか市ができ、都市に発展し、それを核にしてあちこちに局地的な交易市场圏といえるものができあがっていった。…イスラーム世界を覆う広域的な交易市场圏は、…750年頃から少なくとも1500年まで、旧世界の中心文明でありつづけ、東西の相違なる文化、世界を結びつける媒介者として重要な役割を果たしていた。」と記述されている。

インドの胡椒、モルッカ諸島のナツメグ、クローブなどの香辛料は、熱帯・亜熱帯地域ならではの特産物である。これらはイスラム商人により運ばれ、アレクサンドリアで、十字軍以降地中海の貿易権を手にしたイタリアの商人に渡されヨーロッパへと輸出された。こうしてイタリア商人の手に巨額の財がもたらされ、イタリアでルネサンスが開花する一つの要因をつくっていく。そのルネサンスにも、イスラムは大きな影響を与えている。

授業では、日本史からヨーロッパの歴史に関連づけ、イスラム社会に発展する展開としている。イスラムというと、生徒たちはすぐにイスラム教を連想するようだが、あえてイスラム教には触れず、イスラムの他地域とのネットワーク（交易）という点にしぼり、イスラム圏で培われた高度な文明と技術に気づかせることに重点を置いた。

しかし、短い時間で多くのことを伝えようとしてしまうので、どうしても教師の説明が多くなっ

資料1

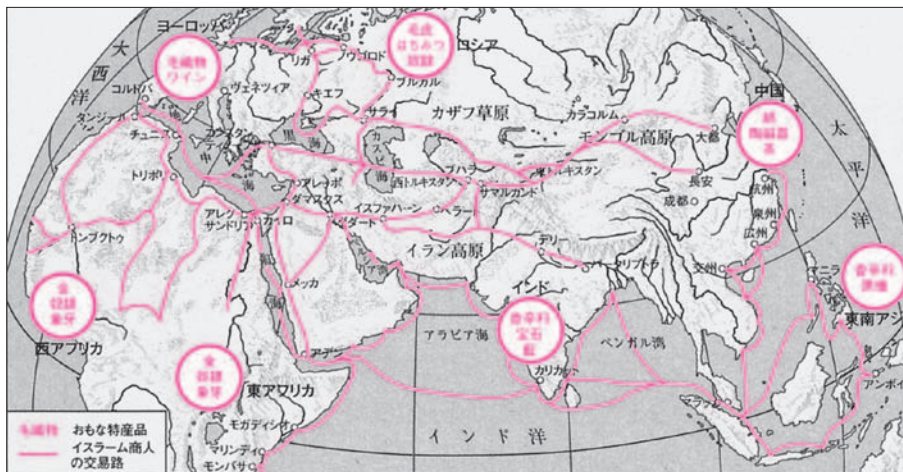
第4章 武家政治の発展と世界の動き 1節 戦乱から天下統一へ

1 南からやってきたヨーロッパ人

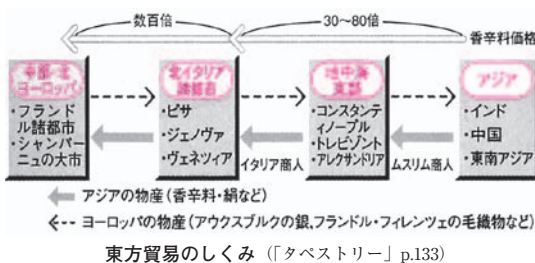
学習日 月 日
教科書 p90~91, 98~99
資料集

作業1 鉄砲はどこから伝わったのだろう？その国を書き込んでみよう。
作業2 コロンブス、バスコ＝ダ＝ガマの航路を書き込んでみよう。
作業3 イスラム商人の交易ルートを、別紙資料を参考に赤で書き込んでみよう。
作業4 アメリカ大陸を書き込み、マゼランの航路を書き込んでみよう。

資料2



資料3



てしまうのが現状である。そこで、コロンブスがサンサルヴァドル島に上陸した絵を使い、「左端に描かれているコロンブスの部下は何をしているのだろう」とか、古代、中世、ルネサンスの「三美神並べ替えクイズ」や、生徒の誰もが知っている

「モナリザ」を例に近代的な画法についての説明など、生徒の集中力が切れないように、コラム的な内容を含め授業を進めている。

本来ならば、イスラム教成立の過程をしっかりと押さえ、岩のドームがあるエルサレムを聖地としたことでキリスト教との争いが生まれ、十字軍遠征に発展し、そしてこの出来事がイタリア商人の東方貿易のきっかけとなったと展開できれば、この後のイスラム社会を取り巻く様々な問題を学習する際にも発展できると考えるのだが、カリキュラムの関係でこのような授業の展開をしている。

3 おわりに

大航海時代やルネサンスといったヨーロッパ世界の転換期は、イスラム社会なしにはあり得なかったといえるであろう。今回の学習を通して、人、モノ、技術、文化そして国と様々な要素が交流しひとつの社会が成り立っていることに気づかせたい。日本の歴史を学習しながら、世界の国々や地域と関連づけ、広く歴史をとらえることができる、そんな歴史観を育てたいと思う。



ダウ船に乗るイスラム商人

要素が交流しひとつの社会が成り立っていることに気づかせたい。日本の歴史を学習しながら、世界の国々や地域と関連づけ、広く歴史をとらえることができる、そんな歴史観を育てたいと思う。